

## 茗溪学園 中学校・高等学校

### 茗溪の英語

中学生では「使える楽しさ」、高校生では「分かる楽しさ」を

教務部長 田代 淳一

TOEIC Bridge、TOEIC テストの併用で生徒の進捗度を測りながらモチベーションの向上を図る

建学理念に「世界的日本人」の育成とあるように、創立当初からコミュニケーションツールとして使える英語を意識した英語教育を実践し、常勤の外国人教員による授業が取り入れられてきました。現在も中学1年では週1回の外国人教員と日本人教員によるチームティーチング、中学2、3年では週2回少人数制の英会話の授業が外国人教員のみによって行われています。

このような英語教育の方針は「楽しくてためになる」というもので、中学生は「使う楽しさ」、高校生は「分かる楽しさ」を感じてもらうことを目指しています。

生徒達に高校卒業時に毎年行っているアンケートの結果からそのような方針を立てたのですが、『英語は好きか?』という問いに、『好き』、『どちらかという好き』という回答が過去4年間平均で67.4%でした。(ちなみに『嫌い』、『どちらかという嫌い』は平均13.0%でした。) さらにそう回答した生徒に、『いつそう思ったか?』という質問をしたところ、中学時だけでなく、高校生の時という割合も高く、これは単語がつながってきたりしてより高度な英語が分かるようになった結果ではないかと分析しました。そこで高校では『分かる楽しさ』、中学ではより英語に親しんでもらえるように『使える楽しさ』をテーマにしたのです。

中学ではこの「使える楽しさ」を味わってもらうための一環として、英語劇やクロスカルチャルトークなどの行事を取り入れ、高校では「分かる楽しさ」を実感してもらえよう、洋書の多読によってリーディング力を鍛えるなどのカリキュラムを取り入れています。

#### 英語学習にも活かされる多彩な行事

通常の授業に加え、同校の特徴である数々の行事は英語教育にもふんだんに取り入れられています。

まず中学1、2年では英語劇が行われます。生徒は7～8人の班に分かれ、全員が何らかの役をこなします。台詞の暗誦、テープを聴きながらの発音チェック、演技の表現などから小道具の制作や、振り付けまで、全て生徒達が約3週間をかけて準備していきます。

中学3年ではクロスカルチャルトークとして海外から来ているJICA(独立行政法人国際協力機構)の研修生や筑波大学の留学生を迎え、交流を図ります。生徒は班に分かれ、それぞれゲストとお互いの文化について話し合います。この異文化交流ではあえて英語を母国語としない研修生に参加してもらうことで、互いの母国語が違って英語が使えればコミュニケーションができるということ、つまり「道具」としての英語を体験することができます。

高校1年ではレシテーション・コンテストが開催され、キング牧師やヘレンケラー、ケネディ大統領などの有名な演説を用いて、発音、アクセント、リズム、表現を学習していきます。各生徒が演説をした人物の人生観や背景を考え、いかに表現するかということ深く掘り下げ、個性に合わせた独自のスピーチを行います。

高校2年では、1週間のイギリス研修旅行が行われます。班単位で難民センターや医療機関といった現地の施設や機関を訪問、パブリックスクールの学生とのスポーツや音楽を通じた交流など、各生徒が英語だけでコミュニケーションを行う内容となっています。この研修は訪問先の学生と渡航前からeメールでコンタクトを取るなど、綿密な事前準備を経て進められていきます。そして帰国後に全員が英語のサマリーを付けたレポートを作成して研修は終了。これまでの行事の集大成とも言えるこの研修旅行は、今まで養ってきた英語力、自分の考えをまとめる力、コミュニケーション能力などを全て発揮する場といえるものです。

#### 習熟度別クラス編成の導入でより細やかな指導を

このように独特な英語教育を進めつつ、同校では新たな取り組みにも着手しています。

その一つとして挙げられるのが今年度から導入した中学の習熟度別クラス編成です。高校では既に行われていたこのシステムを中学にも導入し、英語学習の初期段階からより細やかな指導を行うというものです。定期テストの結果や提出物点などをもとに、年に2回習熟度を測り、中学1年の2月から3つのグレードに分け、習熟度に合わせた内容の授業を進めています。ただ、この制度の導入にはメリットもある一方で、懸念する部分もあったと松崎先生は言います。

「習熟度別でない場合、授業の進捗・難易度や発展的課題の分量等を、英語力がやや低めの生徒達に合わせる必要がありました。習熟度別なら英語力に合わせ柔軟に対応できるようになります。基礎クラスは教科書の理解を中心に基礎固めを、発展クラスの方はプラスアルファの指導も行えます。一方で、基礎クラスの生徒が学習する動機を失ってしまうのではないかとことも心配していました。これに関しては、クラスの名称をN、E、W、Sとして優劣を感じさせないよう配慮し、生徒をよく知っている学年の専任教員が基礎クラスを担当してしっかりと面倒を見て、より分かる楽しさを感じてもらうことを目指しています。」

また、多くの帰国生が在籍する同校では、中学1年生から帰国生